

第2回里地里山保全・活用検討会議 議事概要

日 時 平成21年2月9日(月) 16:00~18:15

場 所 砂防会館別館

議 題

1. 今後の検討の進め方について
 - ①環境省における里地里山の施策
 - ②里地里山保全・活用検討会議の目的
2. アンケート結果等の分析の進め方について
 - ①「特徴的な取組事例アンケート」の実施状況
 - ②アンケート結果等の分析方針について
3. 主な事例に見る里地里山の現状と課題について

○議題1. 2. について

<環境省・事務局資料説明>

<質問・意見>

【委員】

- ・このアンケートは集めることが重要。抜け落ちがあっても日本の現状を網羅的に集めることが必要。それには、①自治体が出す気になるような気配りと②既存の取組事例でわかっているところはちゃんと集めることが必要。

【委員】

- ・ SATOYAMA イニシアティブはどこの地域に向けて発信するのか。日本の SATOYAMA イニシアティブでは温帯地域がイメージされているが、熱帯のやわらかい木が多い雨林帯では日本のように燃料採取を目的にした森林経営は難しい。燃料としての重要性というよりは食べ物、商品価値のあるものをつくらないと無理で、やはりアグロフォレストリーという概念が必要。雨林ではなく半乾燥地帯、ネパールとか、ルーマニアとかだと日本の里山と似ている。一方カナダなどは二次林そのものがないので、二次林の利用という概念が成り立たない。温帯では、アフリカ、インドなどには該当する地域がある。
- ・ アンケートについて、地元の自治体からいくつか問合せを受けたが、①支援策の規模とか負担率が不明、②調査票で求めている地図上に線を引く作業が所有権に関わるため役人としてむずかしい、③部局間の連携がなく、該当なしという回答になりがちということが、回答が少ない要因のようだ。
- ・ また、自治体の事業で応援しているところが対象なのか、ボランティアが取り組んでいるところなのか、前者なら書けるが、後者は行政では内容がわからないということもある。

【委員】

- ・ SATOYAMA イニシアティブとは、西欧的な物質・エネルギー志向、自然を利用資源としか見ないやり方ではなく、日本のように自然と共生している生き方をこれからの環境保全の指導理念にしていこうというコンセプトと理解する。世界中に日本の里山をつくろうという話ではない。熱帯の SATOYAMA、アメリカの SATOYAMA は日本の里山とは全然違うものになると思う。今回の調査はこのような SATOYAMA イニシアティブを力づけて行くための資料にしていかないといけない。

【委員】

- ・ 里地里山の視点をグローバルに広げるときの論点は、広域単一栽培＝モノカルチャーと、生産の場、直接生産に使わない採集の場が入り組んだモザイク的環境、どちらが長期的に見て持続可能かという問題ではないか。
コーヒープランテーションでも、直接生産に使わない自然林を周辺に造った方が実のつき方がよくなることが分かってきた。経済性・効率性を短期的に見るとモノカルチャーになりがちだが、最近ようやく作物の生産だけでなく、どのくらい多様な「生態系サービス」がそこから生み出されているのかというようなことが、世界的に考慮されるようになってきた。
スペインには林の下に作物までつくるアグロフォレストリー的なシステムがある。いろいろなどころにこのような土地利用の知恵があった。持続可能なランドスケープの下で生物生産をしていく伝統的な知恵をぶつけ合ったら実りのある議論になるのでは。
- ・ アンケートは、ボランティア、NGO から直接答えてもらって回収するルートがあってもよいのではないか。

【委員】

- ・ 朝日新聞の「日本の里 100 選」に少しご協力したが、選定の軸は、「景観」、「生物多様性」と「人の営み」だった。100 に絞る前にあげられた二千数百箇所について、現在研究室で分析しているが、そこからわかったことは、①応募した人が残したいと思っている里には、これまでの環境省の定義とは関係のないところが多くあがっている、また②「景観」と「人の営み」はフォローできているが、「生物多様性」は全然フォローできていない ということ。生物多様性からの評価や選定は、やはりトップダウンで専門家が関わるか、環境省としてスクリーニングしていくことが絶対に必要。生物多様性の会議である COP10 に提示していくのなら、そうしないと無責任になる。
- ・ 先ほど発言があった「モザイク的土地利用」はキーワードと思う。評判の青森リンゴ園も栽培方法だけでなく、小さい規模で周りにいろいろあるというような土地利用全体の中で考えないといけない。

【委員】

- ・ 現場に行ったときに問いかけるのは、「水」の循環（使い方や浄化機能）、「土」の循環（輪作や土づくり）と、「森」の循環（はげ山にせず草原として維持、管理のローテーション）。この視点から過去と現在でどう違うのか、見直してみる。そこからその土地その土地をどう使っていけばよいのか、知恵が出てくる。

- ・ 世界をみても循環利用のレベルは日本のほうが高いのではないかと思う。水・土・森とその多様な利用のしかた、その智恵やしぐみをこの調査で積極的に出して行ってほしい。

【委員】

- ・ 自然資本がきちんとしているのが日本のすぐれた点だったが、生産資本、社会資本優先でこれを壊してきた。それを再生することで世界に訴えるポイントが持てるのではないか。千葉県、横浜市などすぐれた取組がいくつかある。そういうところの取組、システムの構造までチェックし、どこの地域でもあてはめることができるものをつくり上げるとよい。

【委員】

- ・ SATOYAMA イニシアティブはむしろ国内向けのほうが必要と前回議論、それも考えてアンケートをとっていくことになったが、「該当なし」が多いというのは、華々しく活動がやられていたり、荒廃が上手に修復されているところが対象と受け止められたためかもしれない。荒廃しているがまだ使われているようなものも拾い上げたい。「該当なし」のところをどう解析するのが課題。
- ・ 都市近郊は NGO からたくさん回答が返ってくるが、一番問題になる中山間地帯ではあまり期待できない。出てこなかったものをどう拾いあげていくか考えて行く必要がある。

【環境省】

- ・ 今回、回答率が低いのは、自治体が忙しくなっているということに加え、支援策がなかなか用意できていない、各省庁から似たようなアンケートが重なった、自治体の各部局にそれぞれお願いしたため逆に連携がとれなかった等があったと思う。対象エリアの線引き方法とかはもう一度検討し、国立公園協会のホームページの Q&A で対応していきたい。
- ・ 出てこなかったときの対応としては、まずは既存の取組事例をできるだけ多く把握するようにしたい。また、出てこなかったところについては、もう一度働きかけをしていきたい。
- ・ 生物多様性の面からしっかり把握すべきというご指摘については、アンケート内容を見て、専門家も入って生物多様性保全に向けた取組をしっかりとやっているような事例については、現地調査も含めて深く分析をしていきたい。
- ・ 熱帯雨林とか亜寒帯に日本の里山を移植しようとしても無理では、というご指摘を頂いたが、我々としてもそのまま日本の里地里山世界をつくろうとは考えていない。生物多様性と人間の活動をどう折り合いをつけていくのか、自然環境の生態系サービスを使い尽くさないように利用していくには、どういう方策が考えられるか、そういうことを SATOYAMA イニシアティブとして考えていきたい。
- ・ 国内の里山をどうするかという点についても、SATOYAMA イニシアティブを提案するなかで、同時並行で検討していきたいと思っている。

【委員】

- ・ 「日本の里 100 選」のデータ分析をやってみて、いかに多様な里があるかということがわかった。山が多いところ、土地利用が非常に混在しているところ、あるいはそれが全くないところ、朝日の一面にのったのは吉野の山奥でずっと自給自足で持続可能な資源利用をやって

きたところ。一方、都市近郊は場所自体の意味はあまりなくて身近な農的環境という意味が大きいようだ。そのほか海岸・水辺など大体6類型くらいが抽出できる。

- ・ このような全国的観点からの分析は、今回のアンケートだけではちょっとしんどいかもしれない。必要ならデータを提供したい。

【委員】

- ・ HP の Q&A があるなら、「検討会ではアンケートを出してほしいという声が強かった」ことを訴えてほしい。
- ・ COP10 に向かうためには、生物多様性の観点はどうしてもはずせない。活動そのものだけで選ぶわけには行かないだろう。ホットスポットでも一種だけでもかまわないが、生物多様性の保全という部分が生きていないといけない。
- ・ 循環型という点については、完全に里山に依存して地域を維持するのは不可能で、化石燃料・化学肥料だけでは足りない部分を里山から補う姿勢、「ベストミックス」が大事ではないか。
- ・ 中山間地では取組の事務局機能として行政の役割が大きいので、アンケート集めは県の地方事務所や農業普及員にお願いしてはどうか。森林インストラクターも。

【委員】

- ・ SATOYAMA イニシアティブを世界というレベルで議論するにあたっては、生命史、人類史を踏まえておく必要がある。アマゾンの森のかなりの部分は原生的な自然ではなく、ヨーロッパ人が入ってくる前には火入れや耕作が行われていた。かつては、自然性が高いところから人為的な自然まで土地利用に幅広いスペクトルがあり、それ全体が崩れたり不可逆的に変わるようなことはあまりなかった。種の絶滅や生態系サービスが失われてしまうというのは最近になって起こってきたことで、それ故に生物多様性条約が必要になったのだろう。

【委員】

- ・ 皆さんに心配して頂いたが、とりあえず第一段階の締め切りデータは、それはそれで意味があると思う。自治体の里地里山への姿勢がわかるし、縦割り行政の中で縦割りでないデータを集めることが難しいということも。
- ・ 次の段階としては、スピリチュアルなもの、プロダクトのためのもの、資源、それから環境調節、里地里山の非常に多様な面に着目しながら、それにあわせてピックアップしていくとよい。平均的に集めて分類するという単線ではだめ。複線で別のサブシステムを動かすことも考えるべき。
- ・ 先ほど指摘があったが、インドネシアのプラカンガンとか、いろんな在来農法の中に森とか農地と持続的につきあう智恵というのはいっぱいある。近代農学では研究されていないが、こうしたものを生物多様性とか循環型土地利用の観点で洗い直すことをやっていくべき。

○議題3. について

<事務局資料説明>

<質問・意見>

【委員】

- ・ 生物多様性の情報が少なすぎる。

【委員】

- ・ モデル地区の現状調査としてはこういう形になると思うが、SATOYAMA イニシアティブに結びつけるとすれば、そこにどうつながっていくのかコンセプトの分析も必要になってくるのではないか。

【委員】

- ・ 関わっている人たちが山をどう管理しているのか、生物多様性とか木の伐り方だとか具体的な基準をもってやっているところも少なくない。そういう点も入れる必要があるように思う。

【委員】

- ・ 海外の人が見ても、施策に取り入れられるような意外に単純な現場の仕組みが役立つのでは。

【委員】

- ・ 自然的、地理的条件からの位置づけをきちんとする。GIS で分析できる手法、資料はあるのでそれを追加した方がよい。

【委員】

- ・ 里地里山で一番大切なのは多様であること。優等生的なところだけでなく、多様な里地里山のなかから絞られてきたということがわかるような選び方が必要。

【委員】

- ・ 委員の先生方が個別に付き合いのある自治体やフィールドからの情報も加えたらどうか。
- ・ 文字情報に偏るのはやむを得ないが、COP10 を考えると、地図データを重ねあわせ土地利用の推移を見せるとか、もう少し客観的データで見せるような調査も加えておくと後々役立つのではないか。

【委員】

- ・ 国連大学高等研究所が進めている里地里山サブグローバル評価で、今言われたようなことを西日本でやっている。今回のグッドプラクティスについても、どんな位置づけになるかフォローできると思う。

【委員】

- ・ 里地里山と人々とのつきあい方には、プロダクト、なりわい、暮らし、或いは環境教育とかいくつかのテーマがあって、それぞれに好事例がきっとある。また、生物多様性だけでなく関わる人の側も多様性があり、テーマへのアプローチも多様。そういうものからグッドプラクティスを示していくのだから、調査結果を分類するというよりは、戦略的に（課題を）整理しておいてピックアップしながら掘り下げていく。そういう進め方を考えたほうが良い。

【環境省】

- ・ 最終的なアウトプットを目指して、それにつながるように事例を分析していきたい。そのためにもいろいろなチャンネルを通じて多様な事例を集めたい。
- ・ 意識しないが残ってきたところ、衰退したものを再チャレンジしているところ、その両方をカバーできるように把握していきたい。
- ・ 複合的な土地利用が行われている農山村の生態系で生物多様性と自然の関係をもっといいものにしていくためのポイントは何か、また、立地特性に応じて計画をつくり取組を実施し、その結果を評価する技術的な方法や手順などをわかりやすく整理してまとめていきたい。
- ・ 3月6日に SATOYAMA イニシアティブの国際発信の口火となるワークショップを計画している。アジア諸国や国際機関も参加。COP10で発信する二次的な自然資源管理のモデル形成につながるものにしたい。そのキーワードとしては、例えば、複合的な土地利用におけるモザイク構造、持続可能な順応的管理、多様な主体の合意形成、それぞれの自然観の尊重などを考えているが、さらに何を足していけばよいのか。今日の議論でも農業、林業、環境がばらばらでなく統合的にアプローチしていくということがでていた。COP10でアピールするようなキーワードを導き出し、合わせてそれを支える情報も整理していく、そういう方向で取り組んでいきたい。

以上